

## 令和4年度 奈良市立二名幼稚園 研究実践概要

園長名 杉浦 順子  
全園児数 12名

1. 研究主題 「たくましく生き生きと活動する幼児を目指して」  
— 子どもの意欲を育むために —

2. 研究年度 2年度

### 3. 研究主題設定理由

核家族や少子化で、入園するまでは家庭中心の生活で温かく見守られていることが多く、生活体験や人との関わりが希薄になってきている。園では、友達と触れ合い、様々な活動に取り組む中で心を動かして「知りたい」「もっとやってみたい」と意欲をもち、主体的にたくましく生き生きと活動する幼児を育てたいと主題を設定した。

### 4. 具体的な研究内容

#### ①研究のねらい

- ・子どもを取り巻く様々な環境と関わる中で、経験を重ね充実感や満足感を味わい、意欲的に生き生きと活動しようとする力を育てるとともに、主体的に遊ぶための保育内容や環境構成・援助を考える。

#### ②研究の重点

- ・研究主題について共通理解をし、日々の保育の中で実践する。
- ・子ども一人一人が主体的に意欲を持って活動し楽しめるような環境構成や援助の在り方を探る。
- ・保護者や地域の方との連携を深め、関わりの中で多様な経験が出来るよう、保育内容の充実を図る。

#### ③活動の方法

#### 【4歳児】 『サンタクロースになる!』(12月)

- 今までの経験を生かして、友達と一緒にサンタクロース工場をつくることを楽しむ。
- クリスマスの雰囲気を感じながら、サンタクロースやトナカイになることを楽しむ。

「サンタクロース工場つくる」「わたしもサンタになる」「ぼくもなる」とA児、B児、C児の3人が保育室に置いてあるサンタの帽子をかぶって楽しそうに話していた。子ども達も『サンタクロース工場』のイメージがわからないので、見守ることにした。「これつかお」とドングリ転がしに使っていた段ボールを繋げてA児が坂道をつくりだした。「どんぐりみたいにプレゼントを流すねん」とA児。「それいいな」「ぼくはプレゼントつくるわ」とB児もC児も賛成してそれぞれにつくりだした。D児も仲間に入り、積み木やカラーボックスなどを使って高さを変えた

り、段ボールにビニールを貼ったりと試行錯誤しながらようやくプレゼントを流す坂道が出来上がった。「ゴールのところにサンタさんの白い袋つけてほしいねん」と保育者に話してくる。ここでようやく子ども達のイメージが理解できた。「どんなプレゼントがいいかなあ？」と一生懸命考えている。「自分がもらって嬉しいものを考えて包んだらどうかな？」と話すと「そうやな。ぼくはポテトがいいな」「わたしはぬいぐるみがいい」自分がほしい物を想像して楽しみ、そのプレゼントが入る箱、そしてその箱を包める包装紙を選んでいる。できたプレゼントを坂道に流し、袋に入ると「やった！入った」満タンになってきた袋を背負って「いってきまーす」とサンタは出かけて行った。5歳児の部屋をのぞくと、誰も眠っていないので、園長先生のいる部屋にそーっと行く姿があった。園長先生が眠っている姿（振り）を確認して、プレゼントをそっと置いて戻ってきた。サンタとトナカイが交代して眠っている子ども達を探しに行き遊びを楽しんだ。



#### <反省・評価>

・「サンタクロース工場をつくる」という子ども達の遊びが実現していく過程において、環境としての絵本、壁面、サンタの帽子などでクリスマスの雰囲気を感じ、サンタクロースへの憧れや思いが膨らみ、そして自然現象による寒さ、北風、木々の変化などがその雰囲気を彩り、今までの遊びの経験と相まって、子ども達自らがアイデアを出しながら、いろいろな方法を試したり工夫したりして、意欲的に遊ぶ姿へとつながった。

#### 【5歳児】 『感動してほしい』（9月）

- 小学生の姿から刺激を受け、自分たちの演技に活かそうとする。
- 共通のイメージや目的をもち、運動遊び参観に向けて取り組む。

運動遊び参観に向けリズム表現に取り組んでいる。演技している姿をビデオ撮影し視聴したり友達と見せ合ったりするものの、少人数であるため「集団の一体感や美しさ」のイメージが湧きにくかった。そこで小学校と連絡を取り、時間割や内容を事前に教えてもらい、小学校運動会の練習の様子を見学させて頂くことにした。

5～6年生のフラッグ演技を見学した。「誰もフラフラしてない」「格好いい」「旗がきれい」など、旗を振る音、動きがそろっていること、隊形移動時に素早く移動していること、集中して取り組んでいることに気が付いていた。翌日は3～4年生のエイサー演技を見学した。「音がそろってる」「ポーズが格好いい」「みんな頑張ってた」など、動きや音がそろっていること、腰を深く下ろす姿勢、手足が伸びていることなどに気が付いていた。

見学をした後「足はこうかな」「もっと座ってたで」「そうそう、いい感じ」と見せ合いや教え合いをしたり「そろってる方が格好いいもんね」「手はこうしよう」「シュッて早く動かした方がいいと思う」と考えを出し合ったりする姿があった。

保育者は「小学校で見たの格好良かったもんね」「先生もそっちの方が良いと思う」など、子どもの意見やアイデアに共感したり認めたりするようにした。



この日から「小学生みたいにやってみよう」「みんなでそろえよう」「お客さんにすごいって言ってほしい」「感動してほしい」と、取り組む姿勢が変わった。保育者に言われるのではなく自分たちで気を付けたり踊り方を考えたりする。ビデオ撮影をすると「もっと腕を伸ばした方がいい」「前より上手になってる」「ここはまだそろってない」と、自分たちの演技をより良くしようと意欲的な姿が見られるようになった。



#### <反省・評価>

- ・少人数学級ということもあり友達からの刺激が少なく、また全員で合わせることの美しさをイメージしにくかった。そこで小学校と連携を取り小学生が運動会に向けて取り組む様子を全員で見に行くことで、運動遊び参観に向けての改善点や目標など共通のイメージをもつことができた。見学することで子ども達一人一人の意識が変わり、運動遊び参観を自分事として捉え自分たちで演技を変えたり気を付けたりする姿が見られるようになった。

### 5. 研究の成果

- ・保育者が、子ども達が遊びの中で自ら考え工夫できるような様々な環境（人的・物的）を整えたことやタイミングの良い援助などが、自分たちで考えて話し合い、遊びをもっと楽しいものにしたいという意欲に繋がった。また、楽しい経験を積み重ねることにより、主体的に関わる力が育った。
- ・子ども達にとって、何気ない「ことば」や「こだわり」に気付いて、受け止めたり、共に遊んだり、見守ったり、共感したりする友達や保育者がいることで、子ども達自身のやってみようとする意欲や、試してみようとする力、繰り返し挑戦することで得られる達成感につながった。

### 6. 今後の課題

- ・子どもが生き生きと夢中になって遊べる環境づくりや援助の在り方について、職員間でしっかりと連携を深めながら、保育内容の創意工夫に努めていきたい。
- ・保育者は、各年齢の発達やその時期に育てたいことを踏まえながら、子ども一人一人の興味や関心を丁寧に見取る力量を付けるよう努めていきたい。